

## 【音韻認識】

文字を読み書きできるための前提条件として、4, 5歳レベルの日常会話や語彙理解の言語発達が基盤となり、4, 5歳頃に発達してくる「音韻認識」の力が必要となってきます。

音韻認識とは、ことばがいくつの音でできているか、始めの音は何かなど理解できる言語の音韻の単位を操作する能力のことです。

音韻認識が弱いと、幼児期に見られる「で/れ」など似ている音の聞き誤りや、「スパゲッティ→スタベッキ」などの言い誤りがよく起こります。

仮名文字（ひらがな・カタカナ）は、文字と音の対応が規則的で、特殊音節などの例外を除いて、1文字－1音の固定的な関係で、音の単位（モーラ・拍）に準拠して作られています。例えば、「すいか」は3音節で「す」「い」「か」と3モーラ（拍）で数えます。

しかし、特殊音節の場合、促音、撥音、長音は1モーラなので、例えば、「きっぷ」は「き」「っ」「ぷ」と3拍で数え3モーラになります。拗音では2文字で一塊にするので、「びょういん（美容院）」は5モーラですが、「びょういん（病院）」は4モーラになります。

音韻の単位は、最小のものが音素で、英語の話しことばの音の単位は音素です。ひらがな「こ」が対応するモーラ音「ko」は、日本語では1個の音ですが、英語では2個の音素の塊「k」[o]になります。また「k」は「c」でも表すことができ、1音2文字対応となります。このようにアルファベットはひらがなよりも音の単位が小さく、音と文字の対応が複雑なため、英語は日本語よりも習得が難しい言語と言えます。

一方、仮名文字は一音対応で学習しやすいので、文字と音の対応学習が難しい音韻性読み書き障がいのは多くは、ひらがな46文字の読みは学習がしやすいと言われています。

また、漢字は意味の単位で文字が作られ、音読みと訓読みがあるため音と文字との対応が複雑なので習得が難しくなってきます。

幼児期にモーラへの気づきがなく、ことば遊びや文字に興味を示さなかったりする場合、読み書きに困難を示す可能性が高くなってくると考えられます。読み書きにつまずきが見られる場合、読み書き中心の学習だけでは、学習意欲や自尊感情の低下を引き起こしかねません。読み書きの困難な要因には、音韻性と視覚性が挙げられ、音韻認識のつまずきが考えられるなら、「ことば遊び」などを通して、ことばの音に注意を向ける力をつけ、文字学習の基礎を養っていく必要があります。